

赤ちゃんの発達と 関わり方

～生まれてから1歳まで

赤ちゃん・ママの発達～



【体の発達】～人生で大切な体が作られる1年～

生まれてからの1年間は、体の成長が著しい期間。

横になってばかりの赤ちゃんが、一人で立ち、手でものを巧みにあやつる事ができるようになっていきます。これは首から骨盤（＝体幹）までが下肢・上肢の動きと連動して動けるようになるための変化と捉えることができます。

体幹が育つと同時に足は体を支える器官として、手が『本来の』手の動きを獲得していきます。この時期に体がどのように発達していったかで、その後の周囲との関わり方まで変わっていくので赤ちゃんの変化を見る時、関わる時に重要にしたい部分でもあります。

◎筋肉、骨格の発達の前に考えてほしい事

生まれたばかりの赤ちゃんにとっては、大人やちょっと大きい子供にとっては当たり前生命活動でさえも初めての経験。呼吸、排泄、哺乳が初めての経験です。それらが、上手くできるようになるためには大人が環境を整えてあげることが大事。楽に呼吸ができ、全身に酸素がいきわたっているか。リラックスして排便がスムーズにできるか、楽な体勢で飲みたいだけ飲めるか、体温が安定しているか。それらがすべて上手くいっていると筋肉や骨格を成長させていく余裕がでてきます。余裕がある赤ちゃんのお世話はママの楽ちゃんにもつながります。ママが楽をしたければ、赤ちゃんの楽ちゃんさがしをしてあげましょう。

◎何よりもふれあいを大切に

生まれた直後から大事にしてほしいのは、肌と肌の触れ合い。

赤ちゃんの皮膚は脳が丸出しになっているとも言われるくらい、たくさん
の情報を取り入れています。

☆そんな、赤ちゃんはどんなことを思っているのでしょうか？

まだ小さくて、両手で全身を抱っこしてあげられる小さい時期にたくさん
たくさんだっこしてあげましょう。コツをつかめば抱っこは赤ちゃん
にとってだけでなく、ママにとっても負担なくできるもの。

抱っこして、しっかりあなたを見ているよと目を合わす事も大切です。

新生児期は、アイコンタクトと特定の養育者とのアタッチメント（愛着
の絆）で育つとも言われています。授乳の時もできるだけ、目を合わせ
て。生まれたての赤ちゃんは色のはっきりした丸いものが大好き。ママ
の目とおっぱいは正に見やすいものの代表。

◎発達の見方

発達が正常というのは、理想的な発達であると言い換えることもできま
す。『理想的』な状態には幅があるので理想的ではないという事が異常で
ある、という事にはつながりません。また、理想的な発達は『無駄がなく』
『協調的である』のも特徴です。発達を見る時は、〇ヶ月だからとい

う視点ではなく、順序よく発達の階段を上っているのかということを中心視します。そして、何が出来るかもですがどう出来るかも重要なのです。

例えば、座れるけど、どう座れるのか。無理して座れるのか、座って余裕があるのか、立てるけど、どこでも立てるのか、無理して立っていないのか、といった具合です。

そして、理想的かそうでないかに捉われすぎず、『生活視点』で見ることでも大事です。食べるには、遊ぶには、着替えるには、頭は？首は？手は？足は？どのように動くのが望ましいのか、子供の動きを見て学んでいきましょう。

◎発達に影響するもの

発達を促していくもの、それがズバリモチベーションです。

子供には、見たい！聞きたい！という欲求があるもの。それは、生まれた時から見られる欲求。それを大人が感じ取り、適度に手を出してあげる事でモチベーションは上がったたり、下がったりしてしまいます。

子供にとって、動くという事は目的ではなく手段です。なので、目的となるものがないと、子供の運動発達は促されていきません。

そして、このモチベーションを維持、向上していくためには思い通りにある程度動ける体である事＝体幹がしっかりしていて手足が良く動くことが大事なのです。

◎発達の決まり



体の発達には、いくつかの決まりがあります。

1. 頭から先へ

頭を自由に動かせるようになってから胴体やお尻を動かせるようになります。

2. 体の中心から先端へ

大きな動きができるようになってから、手先足先などの細やかな動きができるようになります。背骨がS字状のカーブ

を持った状態で2本足で立ったり歩いたりするときの負担をばねのように吸収・分散させて体を安定させ、体が安定するからこそ、リラックスすることもでき手先を器用に使えるようになります。

3. 曲げることから伸ばすことへ

しっかり曲げることができるようになってから、伸ばす動きができるようになる。

4. 右左同時から交互へ

左右・上下別々の動きができるようになる。

5. それぞれの運動は次の動きの基礎となっている。

◎発達の時期別特徴

・ねんね期

重力のない、羊水（ママのお腹の中）からお外にでてきたばかりのこの時期はお外の世界になれていくことが1番の課題となります。

胎内で培った感覚を頼りに動いています。音や、顔面の刺激にはとても敏感で反応します。そして、赤ちゃんにとっては、全てが初めてだらけの状況です。まだ、筋力がない体なので自分の体を思うように動かす事や姿勢を支える事がとても難しい時期なので、まさに1人二人羽織状態。

手足を伸ばせばすぐにママの子宮に当たるというママの子宮からでてきたばかりなので体に何かが触れている、それも面積が広ければ広い方が安心でき姿勢も安定していきます。

この時期一番リラックスできる姿勢は、お腹の中と同じように背中を丸く手足が曲がった状態。なぜなら、背骨のS字カーブがまだできていないから。自由に体を動かせる大人は平らな布団で仰向けに寝るのが一番重力の影響が少ない姿勢と言われていますがS字カーブがない赤ちゃんにとってはお腹の中と同じ背中がCカーブの方が落ち着いてリラックス

スできる姿勢なのです。

手足も背中も伸びているのを嫌がる時期ですが、お腹の中から伸びていた状態だと逆にこれが楽だと感じてしまうこともあるようです。

そのような赤ちゃんこそ、生まれてきてからお腹の中のやり直しをしてあげると正しい体の使い方を習得していくことができます。



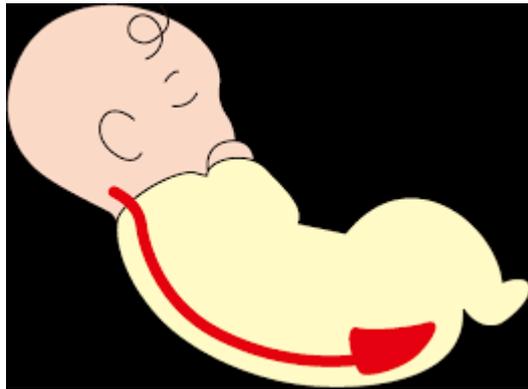
ヒトはリラックスして丸くなる、伸びながら活動するの事の繰り返して柔軟な筋肉が体についていき徐々に大人と同じ S 字カーブが出来上がっていきます。完全にリラックスできると、体も頭もしっかりと休まるので活動する時はしっかりと活動する事ができるようになるのです。

この S 字カーブが完成するのは 10 歳ごろ。特に一人で立って歩くようになるまでは、大人では前カーブを描く腰椎は後ろカーブ。なので歩くようになる 1 歳くらいまでは、背中が丸い姿勢の方が自然に沿った姿勢です。

・赤ちゃんの理想的な姿勢を保つとは？

首から膝裏までが、Cカーブを描く姿勢が理想的です。

抱っこする時、寝る時、授乳の時 お世話のすべての場面でこの姿勢を維持してあげるよう意識します。赤ちゃんは心地よい姿勢を自分で作る事はできません。大人が環境を整えてあげることが大切です。



〈抱っこ〉

抱き上げる時や下ろすときに首がガクッとしてしまうことが多いですが、これは首を痛める原因にも。

抱き上げる時は、首とお尻を支えて。下ろすときも、下ろしたのがばれないようにゆっくりと下ろしてあげてください。

♪簡単楽な抱き上げ方

横向けて

胸を近づけ

頸を支えて

抱き上げる

横抱き、縦抱きでも Cカーブが保たれ首が守られていれば OK.

慣れないと縦抱きで Cカーブを維持するのは難しい事が多いです。

《抱っこに慣れない人は様々な工夫を》

バスタオルを一枚腕にかける

赤ちゃんに密着する

腕を長く使う

抱っこしても落ち着かない時は、抱っこしながら泣くリズムに合わせて

スクワットをしても OK

〈赤ちゃんが安心する抱っこ3つのポイント〉

1、 背中丸く



Cカーブは◎



Lカーブ



Jカーブ



Vカーブ

↑ これらは× ↑



2、手足は曲げて体の真ん中に

3、胴体はねじらない（鼻とおへそがまっすぐ）

☆体がしっかりしてきても、脇に腕をひっかけて抱き上げるは絶対だめ。赤ちゃんが丸く抱く事を嫌がる時は、お腹の中の姿勢の癖が強くて正しいC抱っこだと心地よくない、体のどこかがねじれている、ひっぱられて痛いなどの原因が考えられます。

・抱きにくい時はママの体が原因の事も

抱っこしやすい体になると、すんなり抱くことができることもあります。

これらのちょっとしたケアを試してみましょう。

〈つくねはがし〉



片手で腕をつかむ。

つかんだまま、上を回転させる。

手首からはじめ脇の下までもむ。

以下、骨盤ケアテキスト参照

〈ハの字体操〉〈きらきら体操〉〈タオル玉体操〉〈タオルで首回し〉

〈寝る時の姿勢〉



授乳クッション、かごなどを活用して丸い姿勢で寝かしてあげましょう。

自分で動けるようになり、丸い寝床でなくても寝るようになるまでは丸い寝床でOK

←授乳クッションで



おくるみを活用して丸い姿勢を維持してあげる方法もおすすめです。

おくるみを活用すると、まるい姿勢を保てるだけでなく伸縮性のある布でピッタリ包んであげることで手足を動かしながら筋肉の発達も促されていきます。



布を結んでピッタリ♪↑

シュシュで結んでピッタリ♪↑

⇐バスタオルでピッタリ♪

《バスタオルおくるみの方法》



包んだ時に、顎がひきすぎると呼吸がしづらいので首枕を使ってあげるとよいです顎のひきすぎが防げます。さらに、素材を選べば首周りの凝りもほぐれるので一石二鳥の効果があります。

また、この時期の頭蓋骨はまだつながっておらず簡単に変形してしまいます。その変形が大人になるまで残り、頭痛や肩こりの原因になることもあります。それを防止するには横向きで寝かす、仰向けの場合は首がどちらかに向かないように寝かすといった工夫が必要です。

抱っこから下ろす時は、ゆっくりと横向きで下ろし背中にクッションなどを当てとくと起きにくいです。



☆向き癖はそのままでいいの？

新生児期の向き癖や頭の歪みは、頭蓋骨どうしがくっついていないことが原因で起こります。そのままほっておいても、体は成長しますが、ちょっと使いにくい体になってしまうかも。

ゆがんだ姿勢で、固定された世界を見るとどうでしょうか？体に負担が

生じて肩こり、首コリなどがでてくるだけでなく世界もゆがんで見えてしまうかも。

向き癖があると、体の軸がねじれてしまい顔を向けない側の手は思い通



りに動かせないため両手を一緒に動かす（協調動作）が苦手だったり、向けない側の手足を認識しにくいので頑張って見ようとするために目の動きがぎこちなく

なる事も。

色々な方向から刺激を与えてあげましょう。また、頭の上におもちゃがあると自ずと反り返りやすくなるので足元においてあげましょう。

〈首すわりって何？＝定頸〉

縦抱きにして首がぐらぐらしなければ、首が座ったと思ってませんか。

また、健診でチェックをして首が座ったと言われたら首が座ったと一般的に言われてます。

でも、重たい頭を衝撃から守るためにはそれだけで本当に大丈夫でしょうか？頭への衝撃は横からも斜め下、斜め上あらゆるところから受けますよね。あらゆる方向からの衝撃があったとしても、頭や首を守ることができるようになった時が本当の首が座った状態です。やっとこれで

首の前カーブが完成したと言えるのです。

なので、大人でもまだ首がすわっていない人もいるし、一回首がすわったと思った赤ちゃんでもその後高いところから落ちた、転んだというひょうしに衝撃を受ければ再び首が座っていない状態になることもあるのです。

動物の中で一番姿形が似ている猿と比べても人は4ヵ月、シカなどの哺乳類と比べると1年4ヵ月も未熟で生まれてくると言われています。立って歩けるようになる＝首がすわるまでは胎児と同じように大切に扱ってあげましょう。

〈首座りの確認方法〉

①前後

平らなところに仰向けに寝かせて、両手を持ってゆっくり引き起こした時、体が45°の状態では体と頭の軸がまっすぐ。寝かせる時も同様。

体が反る、お尻が動く、腕や上半身が硬くなる、足をピンと伸ばす

状態があればまだ首はすわっていない。



②左右

左右に体を傾けた時に、首を動かして目の位置を水平に保てる。

③真後ろ

真後ろへの激しい転倒に対して体をひねって手を伸ばし衝撃が加えられた方向に顔を向けようとする。

・新生児期の起きてる時の過ごし方

〈大事なこと！自分の体を知る一步を遊びで〉

正中を知り、体の色々なパーツの左右両方が使えるように遊ぶのが大事な時期です。また、正中に意識的に寄せられると体を支える筋肉をより使うことができるようになります。



〈腹ばい遊び〉

腹ばいになると、重力に打ち勝つように重たい頭を持ち上げようとします。支える場所を変えながら、体を重力に反して空間の中で持ち上げていく動きの中で腕や肩回りの筋肉が強くなっていき、お腹側・背中側両方の筋肉がバランスよく鍛えられていきます。その結果安定した姿勢がとれるようになり、重心も頭から腰の方へと変化していきます。

腹ばいは生まれたその日からやって大丈夫です。逆にこの時期に、しっかり腹ばいをすることで股関節がしっかり伸びる事を経験すると大人になってからしっかり歩ける体になっていきます。



最初は、怖かったり、
どうしたらいいのか分からず泣いてしまう事も。

そんな時はママのお腹の上、お膝の上で腹ばいになるだけでOK.

頭が左右に動くように

お尻の下や胸の下にタオルなどを挟みその子の心地よいを探してあげましょう。

頭の向きをどちらにもいけるのが理想ですが大人がが無理やり変えるのは絶対 NG.背中をなでなで

〈視線合わせ〉

しっかり見れるという事は、全身の発達の第一歩とも言われます。目を動かす筋肉は首と繋がっています。ですので、目をしっかり動かすという事は、骨格の発達にとって大事な首すわりを促す事にもつながります。4週頃から見る力は強くなりますので、生後すぐから目を開けている時は、右左をしっかり見れるように関わってあげましょう。

始めは仰向けで、できるようになったら腹ばいでも同じようにできるかな左右・上下・斜め苦手なところはないかなと確認してあげましょう。注視・追視大事。

〈お手てのケア〉



赤ちゃんの手は、優しいグーで親指が外に出るのが自然です。

親指が中に入っていると不器用になるなんてことも言われるくらい。親指を握りこんでいると、なめなめする機会がないのです。親指～小指まですべての指をまんべんなくなめられると舌や脳の発達

は促され、同時に口の感覚も落ち着てくるので離乳食の時もお口がよ

く動くようになっていきます。5 か月頃までにたっぷり指をしゃぶると、大きくなってからの指しゃぶりは残りにくいので小さい時にミトンなんてせずいっぱい指をなめさせてあげましょう。

・親指が外にでていないときは…



優しく指の付け根
をすりすり

肘関節にねじれ
があると、指がな



められない事もあるので、肘と手首をもち
手首を外側へ軽くねじねじしてあげるのも
効果的。

〈手足の遊び〉



この時期の手足の遊びは、『体の真ん中でそろえる』という事が大事。そして、赤ちゃんのうちは繰り返しがとっても大事。

手を真ん中でそろえる。口元にもってく。足の裏をそろえる。そのような動作を遊びに取り入れてあげます。首がしっかりしてくると手

足の自由な動きが更に促されていくので同時にしっかり首は守って支えてあげましょう。また、まだ利き手はない方が理想的な時期なので左右同時に動かす動き、交互に動かす動きを繰り返しながら左右どちらも使える事を目指してあげましょう。

〈1 2 3のトントントン〉〈スイング〉〈ちょちょちょのあわわ〉がおすすめの遊びです。

・お世話の工夫

この時期の赤ちゃんのお世話で多いのは、おむつ替え。

そして、お着換え。その時も抱き上げるのではなく、コロコロ寝返りしながらさせてあげてOK。

お世話で寝返りの練習もできちゃえば1石2鳥！

横向きで袖の脱ぎ着もらくちん。おむつ替えも横向きだとしっかりおしりまで拭いてあげられます。

・ころころ期に向けて

お外の生活にも慣れてきたころ、笑顔がみられるようになったら次の発達の階段に突入した証拠。頭が向いた方に手を伸ばしたり、回したり。

今までは重力に抵抗して動かせなかった体が抵抗したり、従ったりできるようになっていきます。ずっときゅっとなっていた時代は終わり生理

的に緩んで徐々に外界になれていきます。

伸びやすい時期なので、体を反りかえることも出てくる時期。反り返ってばかりると、抱っこしづらい、おっぱいをあげづらいというお世話のしづらさが出てきます。そんな赤ちゃんと毎日接するママは、不安になったりイライラしたり。せっかくのかわいい時期を楽しめなくなってしまいます。

また、腹筋が引き伸ばされるため、呼吸が浅くなったり、唸り声をだしたり、出臍にもなりやすい…メリットはあまりないのです。

伸びたい時も、布でくるんであげていると、布の中で抵抗を感じ力加減を知っていたり、筋力を強化していったり、皮膚が布に触れることで自分の体の境を正確に把握したり、手がなめやすかったりというメリットが。



赤ちゃんの様子を見ながら、伸びたり縮んだりをうまくできるようにサポートしてあげましょう。

・ころころ期

体を支える力がつき、自分の思う方向を見たり触ったりしながら外界を正しく理解していくと認知能力が高まっていきます。つまり、正しく外

界を知っていく事ができます。

腹ばいで過ごす時間を増やし、自分の体を自由自在に動かせるようにする基礎を作る手助けをしてあげましょう。

〈腹ばいが上手なポイント〉

- ・手足で支えている
- ・上半身より下半身に重心がのっている
- ・首が自由に動かせる
- ・股関節が伸びている
- ・肘が90°
- ・手の回内、回外ができる（首が座った）
- ・肩の下に肘がある
- ・左右に体重移動できる（肩甲骨周りがほぐれていく）



〈腹ばい練習もう一歩〉

- ・首がすくんでいる
- ・膝や足の指で支えていない
- ・常に飛行機
- ・手足で支えていない（手が前に出ない）
- ・重心が高い
- ・腹ばいが嫌い



- ・寝返りの練習

寝返りは、移動手段の第一歩。行きたい！が叶うと、モチベーションはどんどんあがっていきます。できるだけ、連続で寝返りができるように手伝ってあげましょう。

布団の端に横向きで寝かしてあげると、寝返りしやすいです。

また横向きで安定して遊ぶことも、ハイハイに使う筋肉を発達させる大事なことです。



・寝返りとは？

寝返りする前に、自分で足をあげたり足でおもちゃを挟んだり、足をもったりして遊ぶなかでコロンと向きを変えることも。

背中を反るのではなく、丸めた状態で向きを変えるのが本当の寝返りです。

寝返りを繰り返すことで、背骨の周りやお腹の筋肉を強くしなやかにしていくので、寝返りしなくても成長するなんていうのは間違い。

いっぱい寝返りできるようにサポートしてあげましょう。

〈寝返りができるまで、どこを見るか〉

- ・ 横向き遊びはできるかな？布団の端からだと寝返りしやすい
- ・ 足をあげて足を持って遊べるか
- ・ 腹ばいになった時、上下左右に体を伸ばせるか
- ・ 上半身と下半身は別々の動きをしているか



〈手足の遊び〉



手をなめる、おもちゃを持つことができるようになります。

腹ばいでも同じような動作ができると更によし！

手遊びで手足を動かす事で体をコントロールすることを学んでいきます。

♪手をたたきましょう

正中を知る

♪アイアイ

左右交互の動き

♪ひげじいさん

手が上にあがっていく

♪いとまき

肩甲骨と腕の動き

♪茶摘み

正中を超えて交差する→寝返り、ハイハイに

・はいはい期

腹筋がついてくると、前進ができるようになります。そして、自由自在に動けるようになると体幹の筋力は安定して強くなります。体幹が安定すると自分で安定して座る事ができるようになります。

自分で座れるようになるまでは、大人がわざわざ座らせる必要はありません。自分で座るだけの筋力はないので、座り姿勢を維持するために他の部分を緊張させてしまいます。また、自分でバランスをとる練習もできなくなってしまいます。抱っこする時もよじ登ってくるのを待って忍耐勝負です。

・はいはいまでの進化

〈ずりばい〉

後ろに進む・その場でくるくる・お腹&肘

をつけたまま前進する



〈ロッキング〉



両手両膝を床につけて前後にゆする

<ひざばい>



お腹が床か離れて、同側の手足を動かす⇒交互に動かす

<高ばい>



両手の平とつま先で移動

<片手上げ>

左右どちらの手も自由にあげられると脇腹の筋力がついていく

<お座りへ>

膝ばい、高這いから左右どちらかの手をあげてお尻をつく

・お座りの姿勢



はじめは、背中が丸まっていて手は床や足の上について上半身を支えています。その姿勢から、様々な姿勢に移動できるようになるのが理想です。

足の形も正座だったりあぐらだったり、上半身を伸ばしたり、曲げたり、ねじるが自由にでき



るのが GOOD。



〈膝立ち～ひとり歩き〉

体の左右を連動させる動きや左右を別々にコントロールする非対称な動きが増えてきます。立つのは悪い事ではありません。立っても座ることができれば OK。

おもちゃを足元に置くなどしながら、しゃがむ姿勢を維持していきましょう。手を持ったり、歩行器を使って歩かせることはひとり立ち、歩く

力を育むチャンスを奪ってしまうので避けましょう。

《立ち上がりのバリエーション》

- ・ 高這いから上半身を起こす
- ・ 蹲踞から立ち上がる
- ・ 片足を前に出して立ち上がる

振り返りができる、かかとで体が支えられる

体の軸が安定し、横・後ろへの重心移動に耐えられるようになる

この2つができれば、筋力・バランスが整ってきている証拠。

〈脇だっこはしない〉

首に手をしがみつかせて、大人は子供のお尻をすくうように抱きましょう。脇だけをもった抱っこは、この時期でも NG です。



〈手足のあそび〉

♪からだボディパーカッション

♪おすわりやす椅子どっせ

〈全身の遊び〉

- ・ 股のぞき
- ・ ボール遊び
- ・ のぼりおり運動

【脳の発達】

脳は神経細胞からできあがっています。それらが、シナプスという接合部で互いに繋がって情報を伝達し合っています。シナプスの数は学習や経験を重ねると増えていくので、その数が増えるほどインプットの速度はあがっていきます。また、数が多ければたくさんの事のわずかな違いも判断できるようになり、脳が判断して行動する速度もあがっていきます。

シナプスの数は大人で1千億個。増えるのは生後8ヶ月頃までで、その後は生活に必要な見る、聞くを残して減少していきます。それは、脳を極度の疲労から守るため。以降は5感をフルに使って体験や学習を重ねることによって増加し強化されます。

脳へ情報を入れるのも、脳から情報を出すのもスムーズにできると手も口もよく動く賢い子に育ちます。

人間の脳は9歳ころで子供の脳から大人の脳に切り替わります。

胎児や子供の脳は脳の旧皮質、古皮質が生きてますがそのピークは0歳。9歳ごろでその力は消滅すると言われています。脳の旧皮質、古皮質は脳辺縁体ともいわれ、動物的な本能や感性が勝ってるので理屈で理解するのではなく、第6感と言われるような感覚的な力の方が勝っています。子供の脳のうちに、理屈でない大切なことを教えてあげましょう。

◎泣くのはいいの？悪いの？

泣いている時は脳はパニック状態です。

パニック状態の時には、周りも見えなければ、冷静に考える事も難しいですよ。それは赤ちゃんも同じです。

泣いていることが多いとそれだけ、学習機会を失ってしまいます。

◎脳が育つノンレム睡眠

睡眠には、浅い睡眠のレム睡眠と深い睡眠のノンレム睡眠がありこれらが交互に繰り返されるのがよい睡眠と言われています。これらの繰り返しで傷ついた部分の修復、成長発達を促す、疲れをいやす効果が得られます。体・脳が大きく成長する赤ちゃんから幼児期には質の良い睡眠が大切と言われています。

◎感覚・知覚・認知の発達

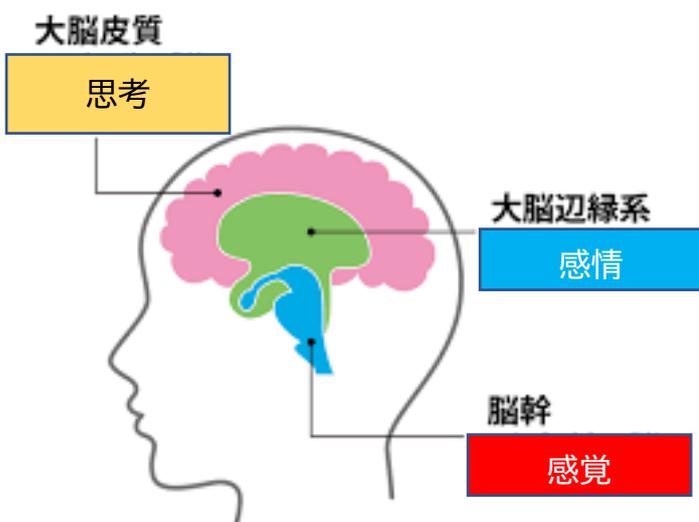
人が生きていくには、5感を使ってインプットした情報を組み合わせながら整理しながら、自分と生きている世界を理解したり、感じていきます。

感覚には、視覚・聴覚・触覚・嗅覚があります。

他にも前庭覚、固有受容覚といった体の感覚を理解していきます。

例えば、ボタンをとめるという動作。じっくり、見ながら、時間をかけてという経験を経て、見なくともできる＝体に記憶された状態となります。体に記憶をすると、神経細胞の先にシナプスができていきます。シナプスの数が多いほどいろいろな動作をスムーズにでき作業や競技が上手な子になります。

◎脳のどの部分が活性化しているのか ～お母さんの発達を観察する～



脳を【感覚・感情・思考】の3つに分けてみると母親自信の発達を知る事ができる。それぞれが、バランスよく活性化しているのがいい状態とされどこかだけ活性化していたり、

どこかが飛び越されてしまっているのはよい状態とは言えない。

《会話や行動の特徴》

感覚（脳幹）

- ・話をしていると不安で涙がでる、不安で動けない、動きが止まっちゃう、固まっちゃう、隅にいる人、立ちすくんでしまう
- ・前後の動きが多い（=その動きをしたい）、動きがストップしてしまう
- ・恐怖麻痺反射、ガラント反射、吸啜反射、手掌把握反射、足底反射が残ってる
- ・体でストレスがかかっている部分は背面（首、肩、背中、ふくらはぎ、足）、目（目が硬い、動きにくい）、背中がまっすぐ
対応➡体に触れる、見てていいよ
金魚運動、キャベツの中から（足裏触れる）

感情（大脳辺縁）

- ・頑張りすぎる人、いろんな質問（こうしてるけど、これでいい？）
- ・上下の動きが多い、子供と一緒に遊んでる
（ハイハイをしながらハイハイで追いかける）
- ・モロー反射、TLR、STMRが残ってる
- ・体でストレスがかかっているところは腰、首上下、肩関節、ひざ関節
例えば・・・しゃがめない

対応 ➡これでいいんだよ、頑張ってるね

だるまさん転んだ、むすんで開いて、おしり歩き、猫

思考（大脳皮質）

- ・おしゃべり多い、プライドがある、何を言っても自分の考えがあるので切り落とされる、受け入れにくい、中々遊んでくれない
- ・左右の動きが多い（体が動かさず口・手ばかり）
- ・ATNRが残ってる（前が見えてない）
- ・体でストレスがかかっているところは、首左右（体ごと動いちゃう）

対応➡しっかり言葉で説明

左右の動き、おうまの親子